猫の居場所
ー夏編ー

第一章 春邂逅

シナリオ／トロワ
イラスト／ひめぎよう

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

はじめに

この度は当サークルの作品をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

当作品は「アズールレーン」の二次創作品となります。
著者の独自解釈やオリジナル設定も含まれますので予めご了承ください。
また性的、暴力的なシーンがございますが、あくまで演出の一環でそれらを助長する目的で表現していないことをご理解いただきますよう、よろしくお願いします。

当作品の文章はトロワに、イラストはひめぎように著作権は帰属します。
いかなる場合をもっても二次転載行為は許容できません。
ご理解とご協力の方、お願い申し上げます。

では作品をお楽しみください。

第一章　春　邂逅

1

誰かに呆れたようなため息が吐かれる。

正確には〝誰か〟ではない。この気付けば様変わりする季節に対してだ。

全く、この間まで寒さに震えていたのが嘘のようだ。

太陽に呆れた目を向ける若葉は、首に下げているタオルで顔についた汗とオイルを拭う。

その時、ふと流れてきた桜の花びらが彼の鼻についた。

そう言えば、暑くなってきているのにまだ桜咲いているんだな。

今年はまだ言うほど酷く天気が荒れたことが無いから桜の散りも遅いのか。少し矛盾した気温と風景に若葉は微笑する。

あれから一週間、怒涛の時間が経過した。

事実上、同棲生活を送ることになった若葉も、勢いだけで彼を介護員に任命した時雨も、最初は互いに勝手がわからなかったため衝突することが多々あった。

しかし日を重ねていくにつれ良好になって行き、かと思えばまた喧嘩して、とまるで長年連れ添った幼馴染か仲の良い兄弟のような関係を築いていった。

そして時雨の怪我も順調に回復し、今日明日で一人で歩くことが出来ると若葉には伝えられていた。

「……ふぅ」

哀愁を込めた吐息が漏れる。

若葉にしてみれば騒がしく、疲れる毎日ではあった。

しかし、人との交流が職場のみになりつつある彼にとってはかけがえのない時間であったことに違いはなく、彼は心のどこかで寂しく感じていた。

だがそんな感傷にふけていても仕事は休みにならない。若葉は今日も暇な職場で、同僚に愚痴を言われながらも、出来る限り精一杯働く。

「あら、なに可愛らしく桜を鼻に乗せているの？」

聞き覚えがある皮肉たっぷりな声が若葉の耳に届く。

彼が声の方向に目を向けると、時雨が手を振りながら自分の足で歩いてきていた。

「時雨……」

「やっほ～」

いつもなら彼女の繰り出す皮肉に対し、若葉はバカ正直に正面切って怒ったりするのだが、今日に限ってはそういう気分になれなかった。

艦船（KANSEN）は通常、担当指揮官とニコイチで日常を行動することを義務付けられている。若葉は彼女がなぜ旧寮にいるのかという理由は知らないが、怪我が完治した今、指揮官の元に戻ると考えるのが普通だろう。

当たり前なことなのに、なぜかとても寂しくて。思わず内頬を噛む。

そんな彼の心情も知らない時雨は思わず首を傾げる。

「若葉？」

「……いや、どうだったんだ。怪我」

「もち、完治よ。これでアンタもお役御免ね」

その回答に若葉は寂しく笑い安堵を示す。対し、時雨は顔の横にピースサインを作り微笑む。上にはねる足に痛みはすでにないのだろう。

もちろん彼女の怪我が完治したことは喜ばしい。

だが……。

「そう、なんだな……。いや、おめでとう」

隙間から思わず零れる寂しさを噛み殺しながら、若葉ははにかみ笑う。

その表情を見て、時雨は何かを感じ取ったようだ。深くため息を吐く。

「な、なんだよ」

もちろん二人の性格は全然違う。いつもいがみ合うほどに違う。

しかし実は根っこの部分は一緒なのかもしれない。そう思うとなんだかおかしくて。

戸惑いの色を浮かべる若葉の顔を見つめ数秒後、時雨はクスリと笑い、その感情を表に出した。

「寂しんだ？」

寂しがり屋。

時雨の繰り出す皮肉もこの性格の裏返しだ。時雨自身はそれに気付いて受け入れている。

だが、なぜ他者に依存することが恥だと周知されているかはわからないが、下手にプライドの高い者ほどその弱点を指摘されるのを嫌がる。

「この時雨様のお世話ができなくなってしまうことが寂しいんでしょ？」

時雨は細く微笑みながら顔を若葉の顔に近付ける。

すると異性の顔が近づいたことに恥ずかしさを覚えているのか、それとも図星をつかれたからか。

理由は定（さだ）かではないが若葉は瞬く間に顔を赤く染め始めた。

「なっ⁉　ち、ちげーよ！」

思いきって否定する若葉。しかしそのあからさまな態度に時雨は再び呆れたようにため息を吐き、彼の肩に手を置く。

「前言撤回。心配しなくてもいつでもお世話させてやるから安心しなさいな」

「時雨……」

別に時雨も本気でこれからも世話してもらおうとは思っていない。

だがせっかくの隣人同士なのだ。持たれ持たれつの関係は継続したいと思っていた。

若葉の方も、これが後生の別れではないことを悟ると、表情が一気に晴れた。

しかしその笑みがあまりにも女々しくて。時雨はとりあえず彼の足のスネを思いっきり蹴った。

「痛っ～～～⁉」

「さっ！　ぼさっとしてないで茶の一つでも用意しなさいな。私、ここでは客人のはずよ？」

時雨はそう言い残すと、身を縮こませ足を押さえる若葉を置いて、髪をなびかせながら何の遠慮もなく一人技術部の休憩所にへと歩いて行った。

×　×　×

一方、そんな二人のやりとりを遠方から見つめている者がいた。技術部のリーダー、技術部長の荒木（あらき）　轟（とどろき）だ。

「……なんで艦船が用もないのにこんなところいるんだ？」

眉をしかめながら副技術長である飯島に問いかける。

「どうやら若葉の知り合いらしくって、最近何回か見かけてます。軍事部に報告しますか？」

そう飯島は上司に伺いを立てるが、荒木は何も答えない。というより聞こえていなかった。

技術部からしてみれば、もともとブラックボックスと言っても差し支えの無いメンタルキューブから作られた艦船は当たり前のように未知の領域だった。

確認できる情報も「並行世界に実在した艦と同等の能力」、「彼女らの身体に直接接続しなくても

思念だけで運用できる艤装（ぎそう）」。そして「指揮する者と厚い信頼関係を結べれば戦闘時、感情がシンクロできる」というなんとも非科学的な情報ばかりで、技術部はいつも頭を悩ませていた。

明石の協力のおかげで艤装の内部構造についてはある程度理解を得たため、一歩先に進めたものの、結局それ以外のことは未だ理解が及んでいない。

故に艦船たちの運営は軍事部、管理は指令部に全て任せ、技術部は極力関わらないようにしていた。

もちろん、特段「彼女らと交流を持つな」という命令は出していない。

それは通常、指揮官の元にいる彼女らとは必要以上に〝交流できない〟からだ。

武器を持っていれば、いずれ必ず争いに巻き込まれる。自分たちはその武器を輩出する側だ。

あえて後方にいるにもかかわらず、なぜ人は危険に身を投げ入れようとするのか。若気の至りで済む話と済まない話があることを彼は知らないのだろうか。

荒木は深く息を吐く。

「いや、別に仕事の邪魔をする様子もないし、どうせ暇だから来た程度の理由だろう。放っておけ」

「はい、わかりました」

なにより、もうあんな悲劇を繰り返してはならない。

あいつらは俺たちを不幸にする……。

荒木は飯島にそう命じるものの、未だ視線を彼らから外さず、目を細める。

「荒木部長？」

流石の態度に疑問を持つ飯島だったが、荒木は答えをぼかし、手元にあったリスト表を彼に渡した。

「……なんでもない。ところで若葉に倉庫からこのリストのパーツ取ってくるように伝えてくれるか？」

「は、はい！」

そう、もうあんなことを繰り返してはならないんだ。

荒木は振り返り、もう一度、別の意味で不幸になり、身体を埋める若葉を見た

◇

2

チリン、チリン――――

鈴の音が響く。

その鈴を身に着ける山城の口から漏れる吐息は荒く、額を伝う汗は拭われることなく風に乗る。

彼女はふと後ろを振り向く。

誰も、付いてきていない。

そう確認すると走る速度を緩め、呼吸を整える。

なんとか巻いたか。しかし気を許して畳みかけられては元も子もない。

山城は付近を見回し、目に入った大木に姿を隠すことにした。

「ふっー……」

大木を背にして山城は大きく息を吐く。

どのくらい走り続けていたのだろう。下駄の鼻を掴む足の指の間が痛む。

何気なく拭った額の汗は想像以上に吹き出ており、山城は驚く。それに気が抜けたからか、どっと疲れが全身を襲い、今度は眠気が襲い掛かってきた。

でもこんなとこで寝たら駄目だ。見つかってしまう。

そう強く思い、両頬を軽く叩いた。

そのほんの少し後である。遠くから何名かの足音が聞こえてくる。

「ちくしょう、あの野郎！　どこ行きやがったんだ」

「今日こそは俺たちで輪（まわ）すんだ。なんとしても見つけるぞ！」

「おーっ！」と男たちは雄たけびを上げ、志気を高める。そして再びどこかへ山城を探しに去って行った。

幸い見つかりはしなかったが、山城は恐怖で震えていた。

いつまでこんなことしなきゃいけないんだろう。

終わりのない、恐怖の追いかけっこに彼女は心身疲れ切っていた。キュッと目を閉じる。

誰か助けて……。

そう叶わない願いを想いながら。

×　×　×

『療養中すまない。今日は君に話があって来た』

その時である。山城の頭の中に男の声が響き渡った。

彼女の姉、扶桑の旦那であり、この軍港の総指揮官を務める節美（ふしみ）　幸蔵（こうぞう）の声だった。
『明石から君の状態は聞いた。戦闘に出ること、というより艤装（ぎそう）を持つことが怖い、と？』
『はい……』
ベッドの上に座る山城はうつむきながら答える。
その身体の至る所には包帯が巻かれており、何か大事故があったことを物語っている。

部下がそんな状態に陥っただけでなく、それが愛妻の妹だと知った彼は何を思ったのだろうか。
山城の答えを聞いた節美は哀しそうに大きな息を吐き、一枚の書類をテーブルの上に置く。
『申し訳ないが、君はもう戦闘には使えない。当たり前の話だが、戦闘に使えない兵器は廃棄処分せざる負えない』
『は……い、ッ……』
弾の打てない銃はいらない。切れない刀は不要。戦いに出れない艦船は必要ない。
彼の言うことはもっともだ。山城は震えた声でそれを承諾する。

しかし彼が置いた書類は廃棄告知書ではなかった。

『しかし、だ。君にはもう一つ道がある』

『えっ……？』

山城は顔を上げる。どういうことなのだろう。

まともな戦闘を積んでいない自分が指導役に回る可能性はない。でもそれ以外考えられる案がない。

『〝兵器〟として使えなくなったとしても……、君は〝女〟としてはまだ動ける』

歯切れ悪く言うその言葉に山城は耳を疑った。

女として……？

背筋に悪寒が走る。しかし彼女は机の上に置かれた書類に、怖いもの見たさか、恐る恐る目を向ける。

もしかしたらここでこの話を断って人生に幕を下ろした方が楽だったかもしれない。

だが、この時はまだ生きることに活路を見出していた。故に数少ない生きる術にすがりつきたかっ

たのだ。

書類を覗こうとした山城を決意したと判断したのか。節美は立ち上がり、彼女が読みやすいように書類を山城に手渡す。

何のためらいもなく山城は書類を受け取る。そして、その書類の題を見て不思議そうな表情を見せた。

なぜならその書類には〝異動（いどう）命令書〟と記載されていたからだ。

『異動？　異動先は……〝楽園（らくえん）〟？』

聞いたことのない部署に山城は思わず復唱してしまう。

『そう。今後は赤子を身ごもる揺り籠（かご）として、この基地に尽力してくれ。山城』

×　×　×

「あぅ……？　はっ！」

知らず知らず眠ってしまったようだ。
節美の哀しそうな顔が浮かんだ瞬間、山城は目を覚ました。

あれからどれぐらい経ったのかはわからない。
だが空の色が変わっていないことから、そんなに時間が経過していないのだろう。
そろそろ動かなくちゃ……。
山城は立ち上がり、再び走り出す。
向かう方向に出口が無いとしても、猫はひたすらに自身の居場所を求めた。

◇

3

「バカ若葉のバカ……」

技術部にある作業室兼客間。ここは二階にある事務室とは違い、外部に開放的な作りになっており、スペースも船の一隻や二隻ぐらいなら楽に入るほど大きい。

その一角で時雨は静かに愚痴る。

「客が来てんだから「あとでやりますから」とか言い様があるってだろうに……」

あの後、仕事を任された若葉は、客人である時雨を一人置いて倉庫の方に向かってしまったのだ。

全く、無神経にもほどがある。せっかく世話をしてくれたお礼にお昼でも奢ってやろうと思っていたのに、約束しそびれるし……。時雨は更に頬を膨らませる。

「わうっ、時雨？」

「あっ、本当だ。時雨ちゃんだ～」

そんな時である。後ろから時雨の耳に聞き覚えのある声がふたつ届く。

「ほえっ？」

完全に気の抜けた声を出しながら時雨を後ろを振り向く。

そこには第三駆逐隊のチームメイトである白露と夕立が立っていた。

「あら、誰かと思えば白露に夕立。どうしたの、こんなところで？」

気兼ねなく時雨は二人に問う。

しかし白露は困惑した表情を浮かべ、夕立に至っては何かに対し怒っているようだった。

「それはこっちのセリフだぞ。明石から大怪我したって聞いたから心配して見舞いに行ったのに、居やしないし……」

「そうだよ。せめて連絡くらいくれないと心配するよ」

赤みがかかった銀髪を揺らし、末妹艦である夕立は頬を膨らませる。頭上にある犬のような耳が勢い良く起(おこ)っていることから、どうやら本気で心配していてくれたことを時雨は知る。その隣で栗色の

二対のおさげを寂しく揺らす白露もそうだ。

そう言えば、上への伝達は全て明石に任せていたから、こいつらに直接伝えるのを忘れてた。

黒畑（くろはた）の件があって動けなかったとはいえ、心配をかけ過ぎた。完全に自分の失態だ。

「そうね。失念してたわ、ごめんなさい……」

時雨は素直に謝る。

だが普段はあり得ないその態度を見て、白露と夕立は驚きにも似た表情を浮かべ顔を見合わせる。

「時雨ちゃん、まだ本調子じゃないのかな？　気分悪かったら言ってね？」

「時雨が素直に謝るなんてなんか気持ち悪いな。変なものでも食ったか？」

「あんたらねぇ……」

あまりにも非情な言葉をかけられしんみりした気持ちはどこへやら。時雨は口端をヒクつかせながら二人を睨む。

だが二人はそんな彼女を見て笑う。これでこそ時雨だ。

「ところで時雨ちゃんはなんでこんなとこにいるの？」

ひとまずわだかまりも解けたので、この話題は切り上げようと白露は抱いていた疑問を話題として提供する。

「え？」

しかしその質問を受けた瞬間、時雨の頭上に大きなクエスチョンマークが浮かんだ。

なんでって若葉に会いに……。

そう言葉が口から出かけた瞬間、彼女は自分と二人の間に出来た溝に気付く。

「あぁ、なるほど」

「？」「？」

そうか。自分はほぼ丸一週間、若葉と二人っきりだったので当たり前のように思っていたが、二人は彼のことを知らないのだ。

そうなると必然的に黒畑のことから話さなければならないか。

いい機会ではある。だが話はとても長くなりそうだ。

時雨は若葉が向かった倉庫に目を向ける。
彼が帰ってくるまでには終わるか？
心配は残るものの、ずっとこのままでも時間の無駄だ。時雨は二人にいきさつを話すことにした。

「まぁ兎にも角にも、とりあえず座れば？」
が、その前にまるで自室のように二人を椅子に勧める。
「それじゃあ」
「失礼します」
性格や容姿は違えど流石姉妹と言ったところか。時雨の勧めに対し、二人は何の遠慮なしに空いてる椅子に座った。
余談ではあるが周りの作業員は皆、この情景を見て「なんか増えてる」と思ったとかなんとか。
「ところで白露の持ってるソレ。なに？」
話題が一転二転することはよくあることだ。時雨は自分に投げられた問いはそっちのけで、さきほ

どから白露が持ち、今は彼女の膝に乗せられている風呂敷に包んだ大きな荷物の中身を問う。

「あぁ、これ？」

白露は自分の問いが保留に近い状態になっていることには特に気にせず、真ん中に置かれていたドラム缶の上に風呂敷で包んだ荷物を置く。

「そういえば出発する時から持ってたな。中身は秘密だ～って教えてくれなかったけど」

言いながら拗(す)ねる夕立。

そんな彼女を見て微笑みながら白露は風呂敷の封を解く。

「おぉ～～～!!」

その中身を見て夕立は思わず感銘(かんめい)の声を惜しみなく絞りだす。

そう。その中身は三人分の弁当だった。

「じゃじゃ～ん♪　ちょうどお昼にいい時間になってよかったよ」

白露は皆に箸を配りながら笑顔を振りまく。よほど良い出来なのだろう。いつもはわはわしている彼女が浮かべる笑みからはしっかりした自信がにじみ出ている。

しかし時雨は片眉をピクピク動かしながら、配られた弁当箱を見つめる。

「どうしたの時雨ちゃん。もしかして本当に体調悪い？」

「いや、大丈夫。いただくわ……」

別に彼女の料理を疑っているわけではない。ただ時雨は自分も人のこと言えないな、と自嘲していたのだ。

若葉との食事は今晩にでもしよう。せっかく作ってくれた弁当を拒否するのも悪いので、時雨は潔くいただくことにした。

「うん、おいしい」

そして更なる余談ではあるが、作業員たちは密かに飯テロを受け、三人に軽い殺意を覚えていたとかなんとか。

「そういえば時雨ちゃん、ご飯どうしてるの？　冷凍食品ばっかり食べてないよね？」

話はまた一転し、すでに本題の影すらない。しかも次に問いを出したのは最初に話題を提供した白露だ。

「もちろんちゃんと自炊してるわよ。療養中は若葉が手伝ってくれてたし」
話題は奇しくも一周してスタート地点まで戻ってきていた。時雨は何も気にせず近状を語る。
しかし急に現れた聞き慣れない「若葉」というワードを聞いた白露の箸が止まる。
「……ねぇ、時雨ちゃん。その若葉って誰？」
「カンコウ植物の名前か？　というかカンコウ植物って食べれるのか？」
「観葉（かんよう）ね、夕立ちゃん。あと食べれないよ。お腹壊しちゃう」
いつもおっとりしてる白露も夕立のこの反応には流石にツッコみせざるを得なくなり、彼女にしては辛辣（しんらつ）な言葉で注意した。
「若葉ってのは寮のお隣さん。ここで勤務しているの」
その告白に二人は「へ～」という言葉を零（こぼ）し、感嘆（かんたん）を表（あらわ）す。
「時雨がお隣さんと付き合いがあるなんて意外だな。虹色に光るそばは持って行ったのか？」
「なんでそんな気味悪いもの持って行かなきゃならないのよ……」
時雨は夕立のボケに思わずツッコみを入れる。しかし本題から大きくずれたことに気付くと軌道修

正を図るためにコホンッと喉を鳴らした。

「ねぇ、二人に聞いて欲しい話があるんだけど。いいかな？」

改まってどうしたのだろうか。白露と夕立は顔を見合わせ、首を傾げる。

「う、うん……」

白露は頷く。夕立も食べ物で頬をパンパンにしながら瞬きし、時雨を見ている。承諾（しょうだく）していると取って問題ないだろう。

二人の行動を目視した時雨は微笑む。そして怪我をした理由、若葉と出会った経緯を語り始めた。

×　×　×

「まさか新しい指揮官さんが、そんな……」

「同じチームの新しい指揮官としてアンタ達のとこにも挨拶に行ったでしょう。その時、奴がどんな声色（こわいろ）でたぶらかしてきたかは知らないけど、これが本性よ」

奴に比較的良いイメージを抱いていたのだろう。話を聞いた白露は思わず唖然（あぜん）とした表情を浮かべている。

しかし対照的に夕立は珍しく、深く考え込んだ面持ちを見せていた。

「どうしたの？」

「いや……。白露、時雨の言ってることはおそらく正しいぞ」

「夕立ちゃん⁉」

「あいつと会った時、ずっと夕立の胸ばっかり見てたことを覚えてる。気持ち悪い目だった。冬立（ふゆだち）がいなければ殴り掛かってたぞ……」

冬立とは夕立の担当指揮官の名だ。ゴー・マイ・ウェイな性格の夕立によく振り回されている彼だが、冷静に状況を見ることに長けており、恐らくその時も黒畑が彼女を卑劣（ひれつ）な目で見ていたことに気付いていただろう。

だがあえて見て見ぬふりをし、なおかつ担当艦を静止させたのは大人の対応というものか。

「でも彼、時雨ちゃんのことすごく心配してたよ⁉」

「そりゃあするでしょ、公然では。初対面で強姦まがいのことをしたなんて言えないし」

買ったばかりの玩具をいきなり壊してしまったら子供はどう反応するだろうか？

素直に壊れた理由を言うだろうか？

十中八九事実をぼやかすか、誰かに責任を擦り付けるだろう。

つまりそういうことだ。見た目が大きな人なだけで中身は子供か、それ以下。時雨は吐き捨てるように言う。

「それは、そうだけど……」

時雨の言葉に白露は納得するも何故か歯切れが悪い。

「白露、なにかあったの？」

視線を伏せ、依然口籠(いぜんくちごも)らせる白露に時雨は問う。

「新しい指揮官さんが出来て、やっと時雨ちゃんが彼からの呪縛から解き放たれると思ってたから……」

その回答に時雨は目を見開き、そしてバツが悪そうに視線を白露から逸(そ)らす。

彼女の言う〝彼〟とは時雨の前の担当指揮官のことだろう。

数年前に時雨と共に担当していた陽炎型駆逐艦八番艦級艦船・雪風と結婚し、この軍港を去った。

時雨自身も彼には多大な信頼を寄せており、いまでも時たま文通をする仲ではあるが、いなくなった当時は手が負えないほど落ち込んでいた。彼女がいまの寮に独りでいるも誰知れず塞ぎ込む為だ。

「――――余計なお世話よ」

呟くように時雨はぼやく。

もっとも、彼女自身あまりインドアな性格ではないためか、すぐに引きこもることはやめた。

しかし彼と雪風と三人で暮らしていた寮の部屋は、その日以降、全然手付かずの状態で彼女自身も出て行ってから一足たりとも戻ろうとも近付こうともしない。

「そうだぞ、白露。それに今の時雨にはワカナっていう心強い味方がいるもんな！」

不意に飛び出した夕立の的確なフォローに時雨は思わず驚く。

幸代　ワカナ……いや、若葉。彼が時雨の塞ぎ込んでいた日々に日の光を照らしたのは間違いない

だろう。会った原因はアレだが、もし隣人でなかったならこんなに仲良くなれていなかっただろう。

「そうね……」

時雨は素直に認める。

しかし、まさか夕立にフォローされる日が来るなんて。私も焼きが回ったものだ。

時雨は自嘲（じちょう）気味に笑う。

だがなんだろ。彼を思うと胸の奥が苦しくなる。

そんなことないのに……。

時雨は自身の心の底で芽生えだした感情を否定する。

しかし自己が否定してもやはり他者は勘ぐってしまうものだ。彼女のそんな心境も知らない夕立は時雨に問う。

「で、もうキスぐらいはしたのか？」

「……はぁ？」

時雨は怪訝（けげん）な態度で夕立を見る。

そう、理由はわからないが夕立は恋愛話、俗に言う恋バナが大好きだ。

しかしそれを自身の中で勝手に想像を膨らませるのなら害はないのだが、こうやって自分の思想を押し付けてくる悪い癖がある。

「だって時雨、ワカナのこと好きなんだろ？」

「えっ、そうなの⁉」

彼女の口車に上手く乗せられた白露は思わず驚く。

だが時雨は手を横に振り、否定する。

「ないない」

チクリと心の中が痛む。だがその鈍痛はおもむろに息を吐くことでいくらか緩和できた。もうあんな思いをするのは御免（ごめん）だ。もう一度あんな思いをするぐらいなら、この胸の痛みを抱いて生きていけばいい。

「嘘はダメだぞ。さっき話してた時デレデレしてたのが何よりの証拠だ」

だが夕立も食い下がらない。姉にめでたいことがあれば妹としてこれ以上嬉しいことはない。

もちろん白露の言う通り、時雨が過去のことを引きずっていることは少し頭の足りない夕立でも重々承知していた。でも過去を清算させなければ彼女は前に進めない……とまでは考えていないものの、とっとと新しい恋して昔の恋なんて忘れるべきと末妹は思っていた。

だが本人からしてみると余計なお世話であることこの上ない。更に前指揮官と別れて以降、夕立とは正反対に時雨はこの手の話が苦手だった。

なので全くと言っていいほど空気を読まない彼女に苛立ちを覚える。

「夕立」

「あっ……」

冷たい声で夕立の名を呼ぶ時雨。その態度を見て、行ってはいけないところまで行ってしまったことに気付いた夕立の顔はどんどん青ざめていく。

「噛むわよ？」

ニヤリと笑い、時雨は鋭く尖った犬歯を見せる。しかし目が笑っていない。
姉からの威嚇(いかく)におてんば娘も流石に逆らえないのか、それとも狼と犬の差なのか、夕立は身を震わせ隣の長女に抱き着く。
「白露～」
「よ～しよし」
白露は夕立の頭を撫(なだ)で慰める。

全く。時雨はふんっ、と鼻息を払うと椅子にもたれかかり、世界を逆さに見る。
しかし若葉ったらずいぶんと遅いわね。そんなに時間がかかる作業を押し付けられたのかしら？
そう思い更ける時雨は彼の向かった倉庫の方に目を向ける。するとそっちの方に見覚えのある黒装束(くろしょうぞく)を着た猫耳の少女が走って行っていた。
「あれ、山城姉さん？」
その様は何か急いでいるようで、普段親しくしている時雨は一層気になった。

何かあったのだろうか？

彼女は椅子の腰掛に手を掛け、倉庫に向かった山城らしき影を追おうと地に足で叩く。

しかし足に力を入れ過ぎてしまったようだ。瞬間、不意な激痛が全身に走る。

「いっったぁ⁉」

「時雨ちゃん⁉」

あからさまな時雨の異変に白露は勢いよく立ち上がる。

「時雨ちゃん、大丈夫⁉　動かないで！　安静に、安静にして！」

時雨は念のため巻かれている包帯の上に手を置き、鼓動する膝を確認する。

だが包帯から赤色が浮かび上がらないこともあるが、何かが噴き出ている感覚はないため、おそらく出血はしていないだろうと自己判断した。

「大丈夫、傷が開いてるわけじゃないみたい……」

時雨はとりあえず笑みを作り、白露を安心させようとする。しかし相変わらず痛みは引いてくれない。少しでも動かそうとすれば激痛が走る。

歯を食いしばりながら足を伸ばす時雨。それを見兼ねた夕立が思わずため息を零す。
「なにやってんだよ。バカだなぁ、時雨は。ほら動くな、動くな」
夕立はその辺から勝手に見繕ってきた木の棒を時雨の足に添える。
「よいしょっ、と」
「ゆ、夕立ちゃん⁉」
そして足と木の棒を普段夕立がブラジャーの代わりに使っているさらしで固定した。
丁寧とは言い難い様（さま）ではあるが、応急処置としては正しい処置で、普段よく怪我をする彼女ならではの知識だろう。

しかし流石に人前でさらしを外すのはいかがなものか。
更に白露のような控えめな胸の持ち主ならとにかく、夕立の胸は重桜の艦船の中でも上位層に入るぐらい大きい。拘束から解放された胸は更に存在感を強調させる。
彼女より一回りほど小さい胸を持つ時雨は、的確な処置をしてくれたことに礼を言うか、それとも

女性としてあるまじき行動を叱責(しっせき)するか悩んでいた。しかしやがて後者はあまり無意味だと気付いた彼女は素直に礼を言うことにした。

「ありがと」

「お、おう！　なんだか時雨に礼を言われると照れ臭いな。えへへ」

まんざらでもない表情を浮かべながら頭を掻く夕立。

「でも縛りが強過ぎね。足の血が止まっちゃうわ」

だが流れるように飛んできた苦情に夕立は頭上の犬耳をシュンと折る。

しかしそう文句を言いつつも時雨はそれなりに感謝しているのは確かだった。彼女が浮かべている優しい笑みが何よりの証拠だ。

「それはそうと乳輪出てるわよ」

「ニュウリン？」

「はわわ!!」

ただこれとそれは話が別だ。時雨は夕立の格好に指摘を入れる。だが夕立は指摘された部分がよく

理解できず、ただ首を傾げた。

夕立は女性らしい身だしなみ、というか振る舞いが苦手だ。なので普段は白露が服装を、時雨が化粧と振る舞いをフォローしている。

その過保護がいけないのか、夕立は一向に女性らしい態度を取ろうとしない。

流石に羞恥心は持っているため、行き過ぎた格好はしないものの、少しぐらい見られても仕方ないという女性にあるまじき考えを持っていたりする。

だから今現在の格好も特別問題視していないのである。

「あはは、ごめんごめん」

白露に具体的に指摘された夕立は笑いながら服を引っ張りなんとか露出部分を隠そうとする。

しかし白露型が着用している制服はどれも丈が短く、いくら引っ張っても夕立の胸の露出部分が隠れる様子はない。

「まっ、いいか」

「よぉくなぁ～～いッ！」

やがて飽きたのか、夕立は軽々しく諦めの言葉を発する。そこにすかさず白露がツッコミを入れるも、根本的な解決方法を考えてなかったらしく、ただ制服を引っ張るだけだった。

「だからバカなのよ、アンタたちは」

それを傍から傍観（ぼうかん）していた時雨だったが、この調子じゃ日が暮れるどころか、年が明けるまでこのやりとりをやってそうだったので、とりあえずツッコミを入れた。

「えぇ～、アンタ達って私も⁉」

夕立と同一視されたことが不服なのか、白露は思わず声を荒げる。

だがいつも時雨にバカ認定されている夕立は仲間が出来たことが喜ばしいのか、笑顔で白露の肩を叩き

「そうだぞ。白露も夕立と一緒だ」

と誇らしげに語る。

しかし白露からしてみると心外この上なく、パタリと地面に腰を下ろす。

「酷いよ、時雨ちゃん。そりゃ私は方向音痴で、ぼーっとしてること多くて、寝るのが好きだから多

少抜けていることがあるかもしれないよ？　でも四六時中、肉と喧嘩のことしか考えていない夕立ちゃんと一緒にするのは酷いよぉ、あんまりだぁ……」

彼女の意見を聞き、時雨はなぜ白露は夕立とバカの方向性まで同じに考えているのか理解できなかった。

だがまぁ彼女は彼女なりに自己観察が出来ているようで、時雨はこれ以上彼女を追及することはやめた。

問題はこちらだ。白露の吐いた本音に夕立はワナワナと身体を震わせている。

「肉と喧嘩しか考えてないって失礼な！　夕立だってたまには天気のこととか野菜のことか考えてるぞ！」

あんまりフォローにならない言葉を並び立てる夕立。その言葉を聞き、白露の肩が更にズンッと落ちる。

だからバカなのだ。時雨は目を閉じ、そう思い馳(は)せる。

だがまただ。彼女らといると話が前に進む気がしない。時雨はとりあえず夕立の服装を何とかしようと指示を出す。

「そんなことどうでもいいから。白露の持ってきた風呂敷貸して」

「そんなこととは酷いぞ、時雨。白露は時雨の言葉で傷付いているのに！」

特段、夕立に向かって言ったわけではないのに彼女は過剰に反応を示す。更に白露が傷付いている理由は夕立と同列に考えられていることであり、究極的に言えば夕立に問題があると言える。

なのにしらばくれてるのか、本当に気付いていないのか。どちらにせよ、つくづく妹艦として情けなくなる。

「アンタが追い打ちしたんでしょうが。更に言うとコトの発端はアンタだって忘れてないでしょうね？」

「う……」

畳みかけるように出てくる時雨の言葉に夕立は思わず後退る。そして少し不満そうな表情を残すが、彼女は素直に時雨の指示に従うことにした。

「はい」

「よろしい。じゃあ背中向けて」

時雨は手渡された風呂敷の両端を掴み、夕立の胸に中心を当てる。そして背中で掴んだ両端を結び、器用にさらしもどきを完成させた。

「おぉ……」

夕立は素直に感嘆（かんたん）の声を零す。そしてやっと自分が何を晒（さら）していたのか気付いたようだ。また服を引っ張り、もうちょっと隠そうともがく。

「流石だね、時雨ちゃん」

「まぁね」

白露からの称賛の言葉に、時雨は誇らしげに鼻を鳴らす。

だがその瞬間、怪我をした膝に鈍痛が走る。痛みが無くなるのはしばらくかかるか。時雨は目を細め、膝を見つめる。

「まだ痛むの？」

「固定しただけで治療したわけじゃないから……。どうしても痛みはするでしょうね」

時雨は冷静に語るものの、時折駆け抜けるような痛みに顔を歪めている。

そもそも座っていること自体、足に圧迫を与えるためよくない。話をするにしても自室で横になってる方が負担も少ないだろう。そう考えた白露は彼女を自室に送ることを決意する。

「とりあえず家で安静にしてよ。ねっ？」

その提案に時雨は思わず口籠る。しかしこんな状態で彼に会うのも問題か。一瞬、倉庫に目をやるも、瞳を閉じ、時雨は重々と頷き承諾する。

「ごめん、お願い」

「いいんだよ。夕立ちゃん、時雨ちゃんを部屋まで運ぶから手伝って」

「あいあいさー!!」

元気良く返事した夕立はどこで用意したのか、担架（たんか）を地べたに展開する。そして白露は時雨の足を、夕立は腕を持ち、担架の上にに寝かした。

「痛くない？」

「うん、大丈夫……」

それを確認すると夕立が担架の前に、白露が後ろに立ち、担架を持ち上げる。

「それじゃあれっつごー！」

「おー」

夕立の号令に白露が片手を天に突き上げ、再び頼りない声で返事をした。

だが今までの丁寧な扱いはどこへ行ったのか。二人はドタドタ音を立てながら時雨の部屋に走っていく。

中で固定されてない時雨からしてみると、その乗り心地は荒波を往く船にでも乗っている気分だ。

もちろん怪我している部分も無事ではなく、添え棒が担架の支え棒に何度もぶつかっている。

「ちょっ、ゆっくり！　ゆっくり運びなさいな！」

流石の時雨も上半身を浮かし、声を荒げ二人をたしなめる。

しかし二人は怒られているにもかかわらず、得意そうに笑う。

「さぁ？　私、バカだから時雨ちゃんの言いたいことわからな～い」

「知らないのか時雨。バカは人の話を聞かないんだぞ？」

白露は天真爛漫に笑い、夕立は誇らしげに目を細め鋭き牙を見せる。

まさか自身の言葉を逆手に取られるとは。時雨は天を仰ぎ、二人につくづく呆れた。

そして時雨の部屋につき、彼女をベッドの上に寝かした瞬間、白露と時雨の頭に鉄拳が降り注いだことは言うまでもあるまい。

×　×　×

なお残った三人の弁当は作業員たちが責任をもって片付けたらしい。

◇

4

ここは倉庫……と言うのは名ばかりの穴倉。

その昔、防空壕として使われていたもの改修して作られたものであり、光を反射させるほどの清潔感はない。むしろ未だ崩れないものの、ときたま土を零す壁や天井からは不清潔感が漂っている。

中は数ブロックの部屋が設けられており、各部屋部屋で管理している代物が違う。学校の教室のように入り口上部には、何が保管されているか一目で分かるように、通し番号が書かれたプレートが設置されている。

また補強しているとは言え穴倉。地震の際、建物が崩れる可能性は非常に高い。

そのため避難経路として東西南北各地に大門を一つずつ。出口に近いブロックには非常扉も設置されており、安全面は最大限の努力が注がれている。

そんな中で現在、若葉は先輩から渡されたメモを元にカートに部品を集めていた。

「えーと、C―二〇五は四つ……」

別段、この作業は嫌いではない。嫌いではないのだが、やはり人の声が恋しくなる……。せめて音楽でも流していてくれれば集中できるのだろうが、無音は少しばかり寂しい。

それに加え、今は客人を待たせていることが大きいのだろう。本来なら今ごろ談笑していただろうに、急く気持ちは寂しさを連れてくる。

その寂しさに耐えきれなくなった若葉はふと腕時計に目を移す。

「時刻は一時半か……」

はてさて二時までには終わるのだろうか。なんとか終わらせて折角来てくれた時雨を誘って飯にでも行きたいのだが……。

首を横に振り、弱気になりつつある自分を吹き飛ばす。「出来るか」じゃない「やるんだ」。そう意気込み、彼は作業を進める。

……ン――チ……――

その時だった。ふと若葉の耳に聞き慣れない音色が飛び込む。

「ん？」

…リン――チリン――

その音は次第に大きくなっていき、やがて若葉はその音が鈴の音だということに気付く。

しかしなぜ、こんなところで鈴の音色が？

いまこの区域には若葉しかいないはずだ。なのに普段ほとんど聞かない音を耳に疑問を持つことなどさも知れず、一層不審に感じる。

「……確認するか」

リスト表を近くの棚に置き、鈴の音が響き渡る廊下の方へ足を伸ばそうとする。

しかし歩き出してすぐ、若葉は自分が軽率なことをしていることに気付く。

もしこれが幽霊だったらどうする？　それとも逃げてきた犯罪者だったりして……！

……そう考えるとお腹が痛くなってきた。やっぱり隠れとこうかな。

いやでも犯罪者が鈴を鳴らすのはおかしい。ここは誰かが秘密に飼っている猫が逃げたと言うこと

にしておこう。

若葉はそう結論付けると、残った勇気を無理やり抽出して、再び足を動かす。

これが漫画なんかだったら運命的な出会いがあったりするのだが、人生そう上手く出来ていない。

そんなことよく知っている。

「ここなら誰も……きゃっ！」

「わぷっ」

知っているからこそ、若葉はこれが現実と受け入れることが出来なかった。

ふと部屋に入ってきた少女と身体がぶつかり、彼方からチリンと音が鳴る。

だが若葉がそれに気付いたのはもう少し後で、まず目に入ったビー玉のような赤い瞳に意識を奪われた。

「かん、せん……？」

次に目が行ったのは頭上に携える猫の耳。それを見て若葉は驚く。

若葉たちより百年ほど昔の、旧き世代の者たちは動物の特徴を持っていたと言われている。艦船たちが動物を模した耳を持っているのも彼らに倣(なら)ってのものらしい。

よって消去法になるが、現在その世代の人が生きているはずがなので、動物の特徴を再現しているのは艦船だけであり、猫の耳を持つ彼女は艦船だと若葉は認識したのだ。

しかし、なんで艦船がこんなところにいるのだろうか。若葉は首を傾(かし)げながらも一歩下がる。

「ここにも男の、ヒト……」

「あの、大丈夫……痛ッ!?」

驚きながら一歩下がる艦船。それを倒れると勘違いした若葉は咄嗟に彼女を支えようと手を伸ばす。

とりあえず落ち着いてもらって話を聞こう。

若葉はそう思い口を開くが、艦船は反射するように彼の手を叩き弾いた。

「嫌っ……」

その痛みに驚くこともさることながら、再び見た赤い瞳と幼さを残した顔に若葉はさらに驚いた。なぜなら、その表情は完全に恐怖一色に染まっていたからだ。その証拠に艦船は怖恐れた声で呟く。

何かに恐怖している。それは理解できるがその対象がわからない。気付けば若葉は手を再び伸ばし、彼女に近寄っていた。

大丈夫。その言葉で時雨とも分かり合えた。彼女とだって。

だがそれは時雨だったから。

彼女には支えが必要だった。

しかし彼女は違う。

彼女に必要なのは、いや不必要なのは男。

そして瞬間、艦船の感情は爆ぜた。

「こ、来ないでください!!」

「ッ……」

強い拒絶の言葉が飛び出る。彼女の心が解けない。

そしてさらに追い打ちをかけるように艦船はポロポロと涙を流し始めた。

「もう嫌……。嫌なんです！」

まるで何かに取り付かれているかのようにいきなりその場に崩れ泣く艦船に若葉は驚き、思わずたじろいでしまう。

だが同時にこのまま彼女を野放しにしたらいけない、と予感した。

〝船としての記憶のフラッシュバック〟。

若葉は時雨が療養中に言っていた言葉を思い出したからだ。

感情が不安定すぎる彼女もそんな個体の一つなのだろう。なおさら落ち着いてもらわないと……。

若葉は息を呑む。

「と、とりあえず君。落ち着こうか」

若葉は笑顔を作り、出来るだけ安心できるであろう言葉を使い、忍び足で艦船に近付く。

だが艦船は素早く立ち上がりフルフルと顔を左右に振りながら一歩ずつ後退る。

……らちが明きそうにない。あまり強引なことは好まないのだが状況が状況だ。

痺れを切らした若葉は彼女を保護から捕獲の方向に作戦を切り替え、腰を低くし構える。

しかしその瞬間、廊下から男の陽気な声が聞こえてきた。

「おーい、山城ちゃあん？　ど・こ・に・行っ・たぁ？」

気持ち悪い声だった。

若葉はその無理のある声に吐き気を催すと同時に、その声を聞いて身をビクつかせる艦船を見て、

なんとなく状況が理解する。

つまるところ彼女はフラッシュバックなんて起こしてはいない。

ただ今、廊下にいる男から逃げているだけだったのだ。恐らく自分のことも奴の仲間だと思っているのだろう。

全てが繋がった。若葉は気合を入れるため、左手で拳を作り右手にぶつける。そしてその音に驚く艦船の手を奪い掴んだ。

「君、ちょっと来て」

「えっ。いやッ……放してください！」

だが恐怖心を抱いている相手の言っていることをそう簡単に聞いてくれるはずもなく、艦船はぶんぶんと握られた腕を振るう。

しかしこうしている間にも声と足音はどんどんこちらに近づいてきている。

時間がない。そう感じた若葉は失礼承知で艦船を無理矢理自分の元に引っ張った。

「いいから！」

「きゃ！」

そして何か叫ばれるとそれはそれで迷惑なので、若葉は艦船の口元に無理やり手を押さえつける。

「んんんんっ！」

しかし見知らぬ相手にこんなことされているのだ。自分もあの男と同類に見られても仕方ないか。

若葉はそう自分で自分に飽きれつつも、彼女を助けたい一心でそのまま近くの空のコンテナを開け、その中に彼女を乱雑に放り込んだ。

「きゃあっ！」

「あの男は俺が何とかするから、君はここに隠れてて。いいな？」

「えっ？　は、はい」

艦船を指さし、若葉は強い口調で命令する。

対する艦船はなにが起きているのか理解できていないようで、目を点にしながら首を縦に動かす。

それを確認した若葉は艦船を笑みを見せ、そして男に悟られないように静かにコンテナを閉め、廊下の方に赴いた。

間一髪だったらしい。若葉が部屋を出ようとした瞬間に男は部屋の前を通りかかった。

白い軍服。どうやら指令部の人間のようだ。指令部の人間が艦船一人追ってこんなところに……？

若葉は不意に過(よぎ)った違和感を拭えなかったが、ひとまず白々しい態度を取り、彼に接触することにした。

「あれ、指令部の方？　どうしたんですか、こんな倉庫に」

「あぁ、技術部の方か。いや逃げだした艦船を探してましてね。山城と言いまして、黒い衣服をまとったショートカットの令嬢なんですが、見てませんか？」

困ったようにも呆れたようにも取れる表情で指令部の者は若葉に相談を持ちかける。

「逃げだした」と言われればなんとなく聞こえはいいが、彼女も理由なしに逃げたりはしないだろう。

それにさっきの上機嫌そうに上ずった声。あれはイラついた時に発する声ではない。

なのでこの表情は演技だということは全容を掴めていない若葉でも容易に理解できた。

「いや、この倉庫では艦船どころか貴方以外の人にも出会ってないので、たぶんいないんじゃないかと」

若葉はすかさず嘘を吐く。ますます目の前の男の同類に染まって行っている気もしなくもないが、そこは彼女のためだ。若葉はグッと己を抑え込む。

「ふむ、そうですか……」

それよりも問題は顎に手を置き悩むこの男の今後の出方だった。

どうする。この部屋を詮索(せんさく)されれば詰みだぞ。

若葉の頬に一筋の冷や汗が流れる。

しかしどうやら指令部の者も秀(ひい)でた者ばかりではないらしい。男はしばらく考え込んだ後、笑顔を浮かべると大きく頷く。

「わかりました。ご協力感謝します。仕事の邪魔をしてしまって申し訳ありませんでした」

体格は男の方が大きいが、力仕事で鍛えた若葉の見えぬ筋肉を見越してか、拳を振られないように少し一歩引いたような言い方をする。

若葉は男の言葉使いに少し不信感に近い何かを感じたりしたが、とりあえず穏便(おんびん)に終わったことに

若葉は心の中で胸を撫で下ろす。

「いえいえ、特徴が似た艦船を見かけたら連絡入れますので」

「恩に着ます。それでは失礼します」

そう社交辞令を交わした後、男はあっさりと来た方とは逆側にある出口の方へと去って行った。

まだ引っかかるところはあるが、とりあえずこの場は収まった。

若葉は完全に足音が聞こえなくなったのを確認すると、彼女を入れたコンテナを開く。

「あっ……」

その中で彼女はちょこんと行儀よく体育座りをしていた。

まだ緊張が抜けきっていないのか、一瞬呆気ない声を出すが、すぐに警戒の目でコンテナを開けた者を睨みつけた。

だがそれが若葉と知った途端、肩の力を抜き、恥ずかしそうに顔を下に向ける。

その一連の動きを見ていた若葉は彼女をまるで本当に猫のようだと思い微笑してしまった。

「お待たせ。あの男はもう行ったよ」

「あ、ありがとうございます」

優しく語り掛け、手を伸ばす若葉。艦船は彼を完全に安心できる相手と確信したのか、今度は手を取ってくれた。

「どういたしまして。おいしょ、っと！」

そしてそのまま手を引き、彼女をコンテナから引き出す。

コンテナから出てきた艦船は目の前の男を信じていないわけではないが、キョロキョロと辺りを見回し、追手がいないことを確認した後、安堵のため息を吐く。

しかし。黒い下地の重王の民族衣装特有の長い袖口に金色で彩られているのは川を流れる桜か。模様が美しいとか可愛らしいとか言う感想より先に無駄に金のかかりそうな服だ、と感じた。

先程は動揺（どうよう）していたこともあり、あまりまじまじと見ることはできなかったが、赤い瞳といい、幼さを残す顔といい、華奢な手足といい、男を惑わすその豊満な胸といい、そして雪のように白い肌といい。まるで誰かの理想を元に作られた人形を見ている気分になる。

本当に自制しなければ手が出てしまいそうな、それほどに上品な者だ。女性経験がない若葉はそう感じた。

「貴方は私を襲わないんですか？」

故にこの質問が飛び出た瞬間、思わず口から心臓が零れそうになった。

「えっ、え？」

思わず挙動不審になる若葉。しかし彼女の目は相変わらず怪訝（けげん）そうに若葉を見つめており、その眼を見て、この質問は至って真面目に聞いていると気付くと若葉はすぐさま冷静を取り戻した。

「ごめん。襲うって、どういうこと……？」

だが質問の意味が解らない。若葉は失礼承知で質問を質問で返す。

「いえ、愚門でした。忘れてください……」

この人はあの人たちとは無関係。艦船はそう判断すると丁寧に頭を下げる。

「先程はありがとうございました。失礼します」

本当ならもっと話をして、なんならここで彼と共に行動したほうが良かったのかもしれない。

だがあの男がいつここに戻ってきてもおかしくなく、彼が嘘をついたとバレたら何をされるかわかったものではない。

だから、艦船はいち早く部屋を出ようとする。

もちろん若葉も追われていることは理解しているので、男が去って行った方向だけを教え、彼女を見送る。

「あ、あの……」

「ん？」

だが部屋を出る一歩手前で彼女は立ち止まり、若葉の方に振り替える。

「疑ったりしてすみませんでした」

そして艦船は小さく頭を下げ、若葉に謝罪する。

しかし大して気にしていない若葉は笑って首を横に振った。

「気にしないでくれ」

それを聞いた艦船は笑みを浮かべた後。もう一度だけ頭を下げ、男が去った方向とは逆の方向に駆

けて行った。

再び静かになった部屋に若葉のため息が響く。

そう言えば名前、聞いていなかったな。

若葉はそのことを思い出し、少し寂しくなる。確か男が呟いていたが、しっかりと聞いていなかった。

まぁわからないことを考えたところでらちが明かない。時雨に聞いてら何か知っているかもしれないし。今はとにかく作業を進めよう。そう頭を切り替え、若葉はうーんっと背を伸ばす。

が、ふと目に付いた壁掛け時計の時刻を見て、思わず顔を青ざめさせた。

「嘘、だろ……」

現在の時刻は二時ぴったり。

時雨との昼食は約束してたわけではないので融通は効くとして、部品集めにこんなに時間がかかる

はずがなく、若葉は急いで残りの部品をかき集めた。

しかし戻ってみると時雨の姿はすでになく、若葉はなぜか先輩たちから空になった弁当箱を三つ渡されるのであった。

◇

5

チリン、チリン――――

倉庫の中に鈴の音が鳴り響く。

その音色はまるで胸の高鳴りのようで。山城は走りながら照れ臭そうに笑う。

同じ男の人なのに、私を襲わない人なんていうんだ。

たまたまなのかもしれない。でもなんだか新鮮で、心の底が暖かくなる。

彼の名を呟こうと彼女は口を開く。でも呼ぶ名前がわからず、口は強く閉まる。

そう、彼の名前を聞くのを忘れていたのだ。それと連なり自分も名乗るのを忘れていたことを思い出す。

山城型は天然な性格の者が多い。それは彼女にも言えることで、それゆえに失敗も多く、その度に

いつも周りを困らせている。

傍から見ると愛嬌があると取られるが、失敗する度に彼女は酷く自分を責める。

しかし今日は違った。初めてドジして良かったと思った。

だって彼とまた会う理由が出来たのだから。

「てひひ……」

自分自身でも恥ずかしいことを考えていることは理解できているのだろう。笑う彼女の顔は赤くなっていた。

でも初対面にもかからず酷く当たってしまった私になんであんなに優しくしてくれたのだろうか。

普通だったら無視するのが妥当なのに。

本当に嬉しかった。

もし仮に結婚することがあればあんな優しい人がいいな。

しかし山城は現実を思い出すと同時に、立ち止まり、輝かせていた笑みを曇らせる。

そして自身のお腹に手を添えた。

願うことは簡単だ。

だが現実は想像以上に難解で、理想がいかに夢泡沫（ゆめうたかた）か教えてくる。

チリン――――

鈴を寂しく鳴らし、彼女は後ろを振り向く。

他の男が危害を加えないように彼の元から離れてきたが、もしかしたら一緒にいたほうが良かったかもしれない。

さきほど別れると決意したのに、決意がぶれる。

今ならまだ遅くない。でも……。

迷う山城の足は前へ一歩。また後ろへ一歩、と無意味に貴重な時間を消費し、近辺の地面を踏む。

「またあの坊主のところに行く気か？」

「ッ!?」

横の部屋から先ほど去った男がのっそりと現れる。

「なんで……貴方は逆の方向に……」

「あぁ、行ったさ。だがおおよそあの坊主が嘘ついてることなんて気付いてたからな。お前らが呑気に話しているうちにこっちに来たんだよ」

男は笑う。だが彼にばれる事を恐れているのか、声は出さず口元だけ弛(ゆる)める。

狡猾(こうかつ)な男の言動に山城は眉をしかめる。でも男との距離は離れている。

逃げるなら今。まだ間に合うはずだ。山城は後ろに向かって地を蹴る。

「おっと逃がすかよ」

しかし男は山城の襟首を掴み、胸元に引き寄せる。

彼女は痛みで一瞬だけ顔を歪ませたものの、諦めはしていないようだ。男の手を掴み、吠える。

「離してください！」

「そういって逃がしてもらったことあったか？　素直に諦めな」

「嫌ッ、んぐッ!?」

男は山城の口元に手を押さえ、無理やり黙らせる。

「あの坊主に気付かれちゃ面倒なんでな。少し黙って――痛ッ!?」

だが山城もされるがままではない。男の手に噛み付き拘束を逃れた。

「黙ってやられるつもりはありません！」

「チッ、そうかよ！」

山城は咄嗟に構えを取る。

しかしそれより早く、山城の腹部から鈍い音が鳴り響いた。

「あ、ぐッ……」

強烈な痛みが彼女の全身を駆け抜け、山城は霞む意識の中、男の手が突き刺さっている部位を見る。

そこは胸の間の少し下にある急所、溝内(みぞうち)だった。

「あぁ、うぅっ……」

山城はなんとかしがみつき抵抗しようと頑張るも、虚(むな)しく男に担がれてしまう。

「手荒な真似はしたくなかったんだがな。俺を怒らせたお前が悪いんだからな」

最後に聞こえたのはそう怪しく哂(わら)う男の声だった。

チリン――――

鈴が鳴る。

あぁ、せめてこの音だけでも彼に聞こえていたら……。

叶うはずない淡い夢を自ら笑い、少女は意識を落とした。

◇

6

夕方。まだ春先だからだろうか。それ相応の時間だが、辺りはすでに暗くなり、電光が道を照らしている。

あれから部長にしこたま怒られた若葉は荷物と謎の弁当箱三つを持ち、帰路についていた。

時雨にも悪いことをしたし、なんだか顔を合わせるのが気まずい。

今日はたぶん彼女にも怒られて、あの艦船のことを聞く間はないだろうな。

若葉の哀愁込めたため息があたりに響く。

しかし時間とは何でこんなに早く経過するのだろうか。

むかし、好んでいた歌の歌詞が「一日はこんなに長く感じるのに一年は早く感じるのか、一年はこんなに早く感じるのに一生をどう上手く過ごしていくのか」というものだったのを思い出す。

全くだ。だが同時に「一日も十分に早い」とも感じる。

だってほら、実際こんなしょうもないことを考えているうちに三十分かかる帰路はゴール寸前に来てしまっていた。

腕時計を見ると時間も三十分ほど経過していることがわかる。これをあと四十七回するだけで一日が潰れるのだ。若葉は自傷気味に笑う。

さて具体的な謝罪案が思い浮かばないうちに自室前についたわけだが、無意識にその横の部屋を見る。

誰か来ているのか？　本人がいるのだ。電機が付いているのは当たり前だが、扉の奥から明るい声がいくつか聞こえてくる。

もしかして彼女の指揮官か？

そう勘ぐった瞬間、罪悪感が胸を刺す。

「……今度でいっか」

せっかくの団欒（だんらん）を邪魔してはいけないと思った若葉は足の方向を変え、自室の鍵を取り出す。

しかしその瞬間、お隣の扉が開き、中から時雨が現れた。

「お帰り、若葉！」

「ただ、いま……」

「晩御飯まだだよね？　今から鍋パーティーしようと思ってるんだけど一緒にどう？」

時雨は気軽に若葉を食事に誘う。

彼女からしてみると何気なくなことなのだろう。

だが、中には彼女の指揮官がいるはず。果たして二人の団欒を邪魔していいのだろうか。鍵を握る力が強くなる。

「若葉？」

首を傾げる時雨を見て若葉は我に返る。

しかし疑問は宙に浮いたままで何も解決していない。だがまた惚（ほう）けるのもおかしな話だ。

何か。何とかして話を繋げないと。

「いや、鍋、いいな。でも誰か来てるんじゃないのか？」

「あぁ、大丈夫。あいつらのことは気にしないで」

なぜかそう問われると時雨は引きつった笑みを浮かべ、若葉から視線を逸らす。

ふと出たあいつ〝ら〟という言葉に若葉は心の中で首をかしげる。ということは来客は一人ではないのだろう。

一人は指揮官として、友人の艦船が来ているとか？

「まっ、細かいことはいいから遠慮せず入って入って！」

そう言うと時雨は若葉の手を引く。

ここまで押されて断るのは流石に気が引ける若葉は鍵をポケットにしまい、荷物を持ったまま彼女の部屋へと連れ込まれた。

「お邪魔します……」

おずおずと頭を下げる若葉。しかし中にいたのは髪の色が栗色の少女と銀色の少女の二人。

一人は栗色の少女はフリルが付いた愛らしい服で、もう一人の銀髪の少女は青いスカジャンを着ている。

確かに極端過ぎる個性が垣間見れる服装ではあるが、それ以外特段問題があるように思えない。

だが名前はわからないものの、二人とも指揮官ではないことを若葉は肌で感じ取る。

自分がいままで思っていたことは全て杞憂だったか。なぜか心の中で胸を撫で下ろす。

ではこの子たちは……？　若葉は名前を問おうと口を開きかける。

しかしそれより早く銀髪の少女が言葉を発した。

「おっ。時雨、そいつがワカメか？」

「ワ、ワカメ？」

見た目印象は非常に良かった。

なのだが彼女から飛び出したその一言で、その印象もなんだか怪しくなってきた。

時雨と比べると淡い赤い瞳が若葉を睨む。

時雨は一体何を教えたのだろうか。若葉は時雨を横目で睨む。
しかしそこには呆れた顔をしている彼女がおり、若葉は違和感を覚えた。
彼女の入れ知恵ではないのか？
そこに甘い声が割り入って来て、銀髪の少女を窘(たしな)めた。
「夕立ちゃん、若葉さんだよ。若葉さん。流石に失礼だよ？」
「そうだったっけ？」
銀色の髪の少女はあどけなく首を傾げる。
しかし本当に彼女に悪気はないことを知った若葉はより一層不審に思った。なぜ彼女はあんな間違いをしたのだろうと。
「ごめん、若葉。あいつも悪気があるわけじゃないの。ただ純粋に馬鹿なだけなの」
すかさずフォローに入る時雨の言葉を聞き、若葉はしっくり納得する。
「バカじゃなくて馬鹿なのか」
「そう馬鹿なの」

深く頷く時雨。

一方、それを見ていた銀髪の少女は心ここにあらずな表情で栗色の少女に問う。

「初対面から馬鹿馬鹿言ってるほうが夕立、失礼だと思うんだけど間違ってるか？」

「まぁ時雨ちゃんだし。対象は夕立ちゃんだし」

「お前も大概失礼だよな。夕立泣いちゃうぞ」

笑う栗色髪の少女に対し、銀髪の少女は口を尖らせた。

時雨を含め、まるで本当の姉妹のような彼女らのやりとりに若葉はなんとなく察しがついていたが、一応質問することにした。

「で、この二人は……？」

するとまず栗色の少女がほんわかした感じで「はい」と返事をして手を上げる。

「白露型駆逐艦一番艦級艦船の白露です。よろしくお願いします」

彼女に続き今度は銀髪の少女が「はーい」と元気良く返事をして手を上げる。

「白露型駆逐艦四番艦級艦船・夕立だぞ。馬鹿じゃないぞ」
そして最後に名前を知っている黒髪の少女が無言で小さく手を上げた。
「で、改めて。白露型駆逐艦二番艦級艦船・時雨様よ」
「なんでお前も自己紹介してるんだよ」
すかさず若葉はツッコむ。
「いや、今思ったら自分からアンタに自己紹介したことなかったな～って」
そう時雨は顔を赤らめながら告白すると、照れ隠しなのか、なぜか若葉の腕を軽く殴る。
しかし軽くと言っても案外力が篭っており、若葉は眉をしかめる。
「痛い、痛い」
そんな彼を見て時雨は「へへっ」と笑う。
全く。若葉は彼女を見て呆れたように微笑み返す。
何と言うか。良いパートナーのような、ちょっと我が強すぎる姉が出来た気分だ。
もっとも若葉は一人っ子なため、兄弟姉妹の感覚などなんとなくしかわからないのだが。

「おりゃ！　おりゃ！」

そんな矢先、突如若葉の右肩に激痛が走る。夕立が彼の肩を本気で殴りつけていたのだ。

「痛ッ⁉　痛いって‼　なんだよお前」

「通りすがりの艦船だ。覚えておけ」

真顔でそう宣言する彼女に若葉は思わずげんなりした顔を浮かべる。

「やっぱりお前馬鹿だろ」

「だから馬鹿だって」

若葉の問いに時雨が即答する。

「うがー！」

それを聞き、あんまりに雑な扱いな上、再び馬鹿扱いされたことに怒りを覚えた夕立はまた若葉に襲いかかる。

なぜ白露型はこうも暴力的なのか。夕立の相手をしながら若葉は呆れかえる。

しかし未だ何も仕掛けてこない者が一名いた。

そう白露型の長女艦であり始祖である白露だ。
若葉は夕立のでこを押さえつけながら白露の方を見る。
「Ｚｚｚ……」

彼女は――寝ていた。

「いや寝るなよ」
「むにゃ……？」
若葉のツッコミに反応するように白露は目を覚ます。
しかし意識は未だしっかりしていないようで、再びこてっと首を傾げる。
こんな二人と鍋をやるのか……？
「……時雨」
「……なに？」

時雨の返答からは「聞くな」と言わんばかりの雰囲気が漂っている。しかし若葉はあえて問う。
「本当に鍋やるのか？」
「……」
時雨は状況を傍観（ぼうかん）する。
「うがー！」
「起きてますよ～、おきてましゅ……Ｚｚｚ……」
こいつらといる時に誘ったのが間違いだったな。時雨は早とちった己の考えを恨む。
「やるしかないでしょ……」
だが今さら後に引けない。痛くなる頭を押さえながら、時雨は答える。
それの回答を聞いた若葉は思わず吹き出す。

基本的に時雨型の艦船はお調子者で人を困らせるのが好きな、ストレートに言うと迷惑極まりない艦船の一種だ。

中には少し目が合っただけでも変態扱いし、警備隊を呼ぶ者もいると聞く。

大抵は警備隊が部屋に着く前に申請を取り消すのだが。

しかしそんな迷惑行為をするのも彼女たちなりのポリシーがあってのことで、そのポリシーとは「困っている人を自身が助けたい」というもの。

自分が人を困らせ、その人を自分で助ける。つまりマッチポンプで欲求を満たしているということだ。

しかし若葉の目の前にいる時雨は、我(が)は強く多少暴力的なものの、あまり人を困らせるような行為をしない。どちらかというと呆れながらも他人をサポートするようなことが多い。

療養中のときもそのような場面が幾度となくあり、若葉は少し違和感を感じていたのだが、いま納得した。

個性が強すぎる姉妹に囲まれているから丸くならざる負えないのだ。

つまり苦労人ポジション。これを笑うなと言う方が無理だ。

「そうか。じゃあ手伝うよ」
「え、いいの？」
パァっと時雨は無意識に笑みを浮かべる。

近くで暮らしていないということは担当指揮官が違うと言うことなのだろう。
だが共にいる時間は本物の姉妹と同じぐらい長いことは、さきほどのやり取りを見て若葉は理解した。だからこそのこの表情なのだろう。
時雨の問いに若葉は快く頷く。

彼の仕草を見て、時雨の心がちょっとだけ温かくなる。そんな気はないのに……。
だが気持ちとは裏腹に彼女の頬は赤く染まり、はにかむような笑みが込み上げてくる。
「仕事帰りなのにごめんね、ありがと」
「気にすんな。ところで荷物どこ置けばいい？」

「そこの犬にでも任せとけばいいわ」

「了解。じゃあ任せた」

未だ若葉に額を抑えつけられているにもかかわらず、手をグルグル回し、彼に噛みつこうとしている夕立に彼は荷物と弁当箱を押し付ける。

「おう！　……って夕立は犬じゃないぞ!!」

普段犬扱いされることを極端に嫌う夕立だったが、本能には逆らえないのか。素直に受け取ってしまう。それから犬じゃないと否定するのは数秒後のことだった。

だが物事をあまり深く考えない性質である彼女は、ふんっと頬を膨らませたあと、何事もなかったかのように彼の荷物をどこに置こうか模索していた。

「あれ、この弁当箱……」

そんな矢先、若葉から受け取った荷物の中に見覚えのある弁当箱を発見した。

そう、昼に白露が持ってきていた弁当箱だ。

「おい白露。起きろ。これ、お前の弁当箱じゃないのか？」

夕立は白露を揺らし起こす。

さきほど一度覚醒していたからか、白露はすんなり目を覚ます。そして大きなあくびをしながら夕立の持つ弁当箱を見る。

「ふぁ……あれ、本当だ。なんで夕立ちゃんが持ってるの？」

「夕立じゃなくてワカメが持ってたんだぞ」

「あぁ、じゃあ持って帰ってくれたんだね……あふぅ……」

そう答えながら白露は台所に並び立つ二人の後ろ姿を見つめる。

幸代　若葉。

彼が時雨にどう作用するかはまだわからないが、夕立が確信したようにかけがえのない存在になりつつあるのは確かだろう。

別に艦船は必ずしも指揮官以外の人間と仲良くしてはいけないという決まりなどない。しかし一般的にはイレギュラーな関係だ。

今後どのようなことが起きるかなど、今の白露では想像することすら難しい。それが好転に向かう事柄なら大いに結構なのだが……。

白露は注視すべき存在を見つめながら目を細める。

「白露？　白露～？　また寝たのか？」

黙り込む白露の頬をつつく夕立。

「いくらなんでもそんなに寝ないよ」

「いや寝るだろ、お前」というツッコミを受けながらも白露は微笑みながら立ち上がる。どうかこの考えが杞憂であることを祈りながら。

「さて、夕立ちゃん。私たちもお鍋のお手伝いしよ？」

「おう！」

それから四人は、ハプニングは数えきないほどあったが、賑やかに鍋パーティーを行ったのであった。

だがこの和やかな雰囲気に飲まれ、若葉は時雨に大事なことを聞くことを忘れていた。
特に時雨の指揮官についてはこの時に聞いておくべきだったと後々後悔するのであった。

◇

7

若葉たちが鍋で楽しむ一方、コンテナヤードの端にある、作業員が休憩に使う事務所。ここでもう一つのパーティーが行われていた。

「待って、本当にこれ以上は！」

荒い息と共に抗議の声をあげているのは山城。

倉庫で男に気絶させられてからかれこれ五時間。その間、彼女はここに集まっている男たち十数人に代わり代わりに犯されていた。

肉茎を恥裂に押し込んでは出し、押し込んでは出し、ギャラリーは山城を押さえ、ときたまその柔らかな肉を吸い喰らう。

ふんわりしたショートヘアは乱れ、子種を絡ませ見る影もない。

顔には未だ乾かない白濁の雑なメイクが施されており、その姿は無残としか言い様がない。
しかしそれでも男たちは彼女に喰らいつく。
ここに集まる獣たちに〝猫狩り〟のルールは適応されておらず、ただ本能だけで彼女を求める。

そう、ここは檻。ただ女肉を貪るだけの檻。
そんな中、山城は子猫という形をした餌でしかなく、必死に張り上げた鳴き声など猛獣たちは聞く耳など持たない。

「逃げたお前が悪いんだろ？　オラッ！」
また肉茎が山城の恥裂に押し込まれる。
恥裂から零れる、と言って正しいのかわからない、クリーム状になった子種には鮮やかな赤色がときたま混じっている。
何度も何度も無茶な性交を繰り返されたことによる膣内破傷。放っておけば感染症も免れない危険

な状態だ。

だが男たちは、薄暗くて見えにくいということも手伝い、そんなこと気にも止めず行為を続ける。

「ははっ、お前何回目だよ」

「さぁな。ただもう片手では数えれないぐらいはしたぜ」

ギャラリーの問いに山城を愉しむ男は卑劣な笑みを浮かべ答える。

しかしその声もノイズが混じってまともに聞こえていない。そしてノイズが走ると共に脳が何かに突かれるような感触による嫌悪感が広がる。

それは快楽、ではなく疲労による頭痛が身体を突かれることによって一時的に増幅している、言わば警告音。膣が切れて痛もうが、そちらの方が何倍も痛いので気になっていないのだ。

山城は必死に訴える。目もかすむ。頭以外の痛みももはや感じない。本当に声が発せているのかどうかもわからない。それでも山城は突かれる衝撃で声が途絶え途絶えになりながらも訴え続ける。

それでも男たちは動きをやめない。やがていま蹂躙している男が山城の中で果てる。

男が耳元で何かささやく。

罵倒か、感想か、喘ぎか。

なんにせよ、自分の中に出している。なのに、彼女にはその感覚が全く伝わってこなかった。

〝気持ちいい〟も〝気持ち悪い〟もこの際どうでも良かった。もう全てどうでもいい。ただこの凌辱が終わることを切に願った。

朦朧とする意識の中、男の肉茎が山城の身体から引き抜かれる。

一時的な、ほんの一時的な休息。だが臨界点に達しかけていた山城の脳はそれを「オワリ」と勝手に判断した。

「うわっ、なんだなんだ？」

彼女の身体全体から力が抜け、精液と愛液で出来た水溜りへ崩れ落ちた。

それを咄嗟に支えようとするものはいない。水が弾ける音はせず、鈍い音が辺りに響く。

騒めく集団の中、男の一人が山城の肩を蹴り仰向けにする。

「おいおい、白目向いて痙攣（けいれん）してるぞ。大丈夫か、これ」
「水でもかけてれば大丈夫だろう」
「なんせ、俺たちとは違う艦船サマなんだからな」
男たちは笑う。彼女の生死なんて気にしていない。理由はとても簡単。

彼女は人間ではない。艦船だから。

ただそれだけのこと。それだけの理由でこんな非人道的な行為をたやすく行える。
虐待願望があるものからしてみると願ってもいない適材だ。
もちろん指令部の人間全員がこのような願望があるわけではない。
ただ少なくとも今日、ここに集まっている者は全員そういった願望を持ち合わせている。
「そりゃそうか。オラッ！」
「かはッ⁉　ゴホッ、カホッ、ケホッ‼」

男の一人がバケツ一杯の水を山城にぶっかける。
するとその水の冷たさで彼女は目を覚まし、大きく咳き込んだ。
「おっ、起きたか、山城ちゃん」
「じゃあ続きと行こうか」
「ひゅー……、ひゅー……」
男たちの下品な笑いが場を包む。
誰もが山城の今にも絶えそうな呼吸音に耳を傾けようとしない。

別に山城はこの者たちに助けて欲しいとは思っていない。
ただ誰か、誰か手を差し伸べてくれないか。
思い描いたのはあの男性。

地面を眺めるぼやけた目からは、いつの間にか涙が溢れ出ていた。

「さぁパーティはまだまだこれからだ」
男の一人が山城の手を掴み、彼女を持ち上げる。
未だ身体に力が入らず項垂れる。そんな彼女が唯一と言っていい動かせる眼は虚ろ。
汚れた髪の間から覗く眼は男の欲情を加速させる。
さぁ、どう調理するか。罵倒(ばとう)して前髪を引っ張るか。
それとも怒鳴り上げて頬を思いっきり叩くか。
いや、あえてねちっこく攻めて更に体力を削るのもアリか。男の舌が音を鳴らしながら這(は)いずる。

「いいえ、そろそろ終幕よ」
その時である。
どこかから声と共にシュッと風を切る音が鳴ったと思ったら山城を掴んでいた腕が消え、代わりに男の手からは血飛沫を吹いていた。
痛みは無く、男は思わず「えっ？」と声を出し驚く。

そして正面を向く頃には彼の首は身体を離れ、宙を舞っていた。

その声は本当に声だったのか。実は首を切断されたときに溢れ出た空気だったりするのだろうか。

男の頭が地に落ち、音が響くまで何故か他の者たちはそんなことを考えていた。

それは恐怖からの逃避だったのだろうか。困惑する心を和ませるためなのか。

どちらにせよ、赤黒く艶(あで)光る刀から目を背けたかったのは確かだ。

「たまにいるのよね。ルールを無視して過剰(かじょう)な行為に走る輩が」

声の主は山城の身体を地面に優しく寝かしながら冷静を装い語る。だが碧(あお)い蝶の髪飾りが凛と煌(きら)びやかしながら立ち上がる女は長い黒髪で目元を隠しているも、その眼に怒りの炎が灯されていることは言わなくてもわかるだろう。

「あ……アンタは……」

男たちがその者の顔を見て、我に返ったのか、いきなり淀めき始める。

しかしそうたじろっているうちに、女は更に二、三の男の醜い突起を切り飛ばされる。

もちろん突起とは股間から生えているものも示し、主に五体と言われている部分も示す。

そこをいきなり切り飛ばされて失血死、あるいはショック死しない者は本当に一握りだろう。

「下衆な声が大きく響いてたから容易に侵入することが出来たわ。夜は静かにしなさって親御さんに言われなかった？」

安い挑発。だが男たちが焦るのは見られてはいけない者にこの現場を見られたからだ。その挑発は耳に届いていない。

「くっ、クソおおおッ!!」

発狂した男が何人か女に挑んでいく。

素手と太刀。仮にタイマンなら勝ち目はなかっただろうが、残念ながらこちらには数がある。あとは男と女だ。貪ればいい。

そう浅はかな考えで挑む男たち。だがその考えは瞬く間に霧散していくことになる。

まず最初の男は見向きもされず横に流され、二番目の男の身体が斜めに斬られる。

二番目の男は思わず後ろへ姿勢を崩し、以降三人は雪崩れる様に地に尻をつけた。
そうしているうちに無視された最初の男が方向を変え、女目掛けて再び突っ込む。しかし突っ込まれたのは男の方で気付けば彼女の履く下駄で鼻の骨を折られ、顔面の中央部が沈没している。
そこから繰り出されるけたぐりに反応など出来るはずが無く、この男もまた他の者と同じく地に身体を沈ませた。
「男が数で挑んできているのにこの程度なの？　指令部の名折れね」
女はため息を吐くと勢いをつけ、後ろで転んでいる男三人を斬りつけていく。その手際は鮮やかで、たった一瞬で絶命させている。
僅かに差し込む月明かりが女を照らす。黒い装束に白い肌。それを彩る緋（あか）い血。鎌こそ持っていないものの、その姿を死神と彷彿させる。
髪から覗く山城とは対照的な深い藍色の眼が男を刺す。
嫌だ……俺はまだ死にたくない。
「待ってくれ！　俺たちはアンタたちに何も反旗を翻（ひるがえ）していねぇ!!」

「そう」

男の苦し紛れの言い訳に女は返答する。

だがその言葉は果たして言葉と言っていいのか、まるでただ息を吐いたようにも思えるほど質素な回答だった。

だが男は確かにその言葉を聞いた。ということはまだ交渉の余地がある。言葉を続けようとする男の顔に笑みが広がる。

だがその笑みは足に突き刺さる太刀によって一瞬で奪われた。

「ぎ、ぎやあああぁぁぁぁぁぁ!?」

「私の妹をこんなにして、よくそんな言葉言えたものね……」

突き刺す太刀は震えており、抜いては刺し、抜いては刺し、女は妹がされたことを男にやり返す。

だがこんなことしてもまだ辛うじて意識がある。

死んでもいい、早く終わってくれ……。男は心の中で懇願(こんがん)する。

醜(みにく)い喘ぎ声だった。聞くに耐えれないほど醜く、身勝手で、妹がこんな奴らに凌辱(りょうじょく)されていたのか

と思うといたたまれない。

「安心しなさい。総指揮官様には許可取ってますから」

女はそう明かすと歯を食いしばり男の首を刎(は)ねた。

生暖かい水が地面につけている頬に伝う。同時に何かとんでもない鉄の臭いも感じる。ふと山城は目を開けた。

最初に目に入ったのは先程まで自分を犯していた男たちの亡き姿。微(かす)かな明かりが血の赤を照らし、不自然な重なり方をしていることから死んでいるのは一目瞭然だった。

山城はそれに驚きはしたものの声を出したり、パニック状態にはならなかった。

ただ「終わったんだ」と安堵(あんど)した。

でも誰が助けてくれたのだろうか。擦れる視界で女の後ろ姿を見る。

「姉、さま……？」

既視感のある後ろ姿に無意識に山城の口から問いが零れ落ちる。

声に気付いた女は納刀した後、遠くに置いていたバスタオルを持ってきて山城の身体を包んだ。

「大丈夫？」

あぁ、やっぱり姉さまだ。いつもの優しい笑みを見て山城は安堵する。

だが彼女の頬に付着する血を見て山城は目を見開く。

怪我をしている。私のせいで。

山城は頑張って手を伸ばし姉の頬の血に触れる。

「姉さま……血……」

頬に触れるも力が入らないのか、滑るように手は落ちていく。それと共に血も払拭されるが、下には傷はない。

男たちを〝処罰〟した山城の姉、扶桑（ふそう）型戦艦一番館級艦船・扶桑はまるで赤子の手を掴むように優しく山城の手を取った。

「大丈夫、私のじゃないわ」

それを知った山城は唯一の心配事が無くなったからか、再び気が遠くなっていく。

「姉さまの手、あったかい……」

そう笑って山城は再び意識を失った。

その笑みに釣られ、扶桑もまた笑みを浮かべる。そして彼女の頭を撫でようとしたが、自身の手にまだ血が付着していることに気付くと寸前で手を止めた。

「……ごめんね、山城」

そう謝罪すると扶桑は山城を抱え、この場を後にした。

◇　続く